



TITLE:

1 はじめに(京都大学基礎物理学研究所研究会「科学としての科学教育」,研究会報告)

AUTHOR(S):

坂東, 昌子

CITATION:

坂東, 昌子. 1 はじめに(京都大学基礎物理学研究所研究会「科学としての科学教育」,研究会報告). 物性研究 2010, 93(4): 366-367

ISSUE DATE:

2010-01-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/169204>

RIGHT:

1 はじめに

世話人代表 坂東 昌子

今回行いました研究会は、通常の物理学の対象である個別のテーマではなく、科学教育そのものを科学するということを意図したものでした。湯川先生がノーベル賞を受賞されて、この基礎物理研究所（以下、「基研」）が出来たのですが、そのとき、初代所長となった湯川先生は物理学の対象を広く考えられて、「素粒子研究所」とか「原子核研究所」とかいう名前は付けられませんでした。このように、宇宙物理や生物物理といった新しい分野を開拓することのできる基研の性格付けが決まったのです。ですから、科学教育を科学として対象にしようという研究会は、ある意味で基研の設立趣旨に沿ったものだといえます。しかし、実際には、従来の研究会は、自然現象に固有の特定のテーマに限られた研究会が殆どで、こうした性格の研究会は初めての試みでした。

本研究会の参加者も、学校の先生や他分野の方々など、基研に来られるのは初めての方も多かったので、2日目の懇親会の前には、九後汰一郎さん（前基研所長・湯川資料室責任者）にお願いして、湯川先生がかつておられた研究室（現・資料室）を案内していただきました。佐藤文隆さん（「あいんしゅたいん」名誉会長・元基研所長）も一緒に説明をして下さいました。次ページの写真はその時のものです。

この研究会に初めて参加された方の中には、あまりに遠慮なく発言する人が多いので、「物理屋は口が悪い」と思われる方もいらっしゃるかもしれません。カルチャーショックを受けた方もおられるのではないかと思います。物理の分野では**本音**で物を言う人が多いので、人は好いのですが、一見、人が悪いと誤解されるかもしれません。しかし、物理の世界では、「真実の前には身分や階層や年齢にかかわらず、平等である」という基本精神のもと、議論を戦わすことによって真実を見つけ出すという共同作業が習慣になっているのです。「この研究会は密度の濃い大変おもしろいものでした。熱気あふれる雰囲気圧迫されました」というような感想が多数寄せられましたが、これはある意味では、物理学分野の1つの特徴を現しているのでしょう。

この報告集をご覧になれば分かるかと思いますが、各講演やコメントのみならず、ポスターセッションも賑やかだったことも忘れることはできません。多くの方が、自ら熱意を傾け取り組んでおられるテーマについて、的確な形で全体像を掴めるように工夫され、具体的・実践的な形での問題提起と共に、今後の方向性を示していただいたことに感謝しております。

私たち世話人にはこの熱意を次に繋げて行きたいという思いもあり、研究会の雰囲気をそのまま伝えることが出来るように、研究会終了後、原稿締切までたった2週間の超特急スケジュールとしました。執筆者の方々には心からお礼を申し上げます。おかげで、この熱気が伝わるこの報告集をま

とめることができました。この報告が、更なるテーマの発展に寄与することを願っております

最後に、初めての試みでここまで議論を高めることができたのは、講演者やポスターセッションの発表者のみならず、参加者の貴重なご意見コメントが大いに寄与していると思います。多くの方々が世話人の意図をくみ取ってくださり、議論に熱心に参加して下さったことに、心からお礼を申し上げます。

最後に、この研究会の共催団体として、物心両面でご支援いただいた日本物理学会京都支部をはじめ、諸団体の皆様に、心から感謝の意を表したいと思います。特に今回は、物理学分野のみならず、他分野の方々や、異なる環境にいらっしゃる参加者の為に、基礎物理学研究所の研究会担当秘書、上田順子さんには、きめ細かく対応いただき、丁寧にご案内をしていただきました。さらに、少ない予算の配分など、お手間をかけた日本物理学会京都支部の尾崎智子さん、この研究会の懇親会等の運営にボランティアでお世話下さった SE ネットの網倉聖子さん、後片付けなどお手伝いいただいた、谷口正明さん、小林泰三さん、小西琢真さん、安田淳一郎さん、若い学生の皆さん達、それに、僅少のアルバイト代で大役を務めていただいた山田吉英さん、前直弘さんの頼もしいサポート、HPを担当いただいた中谷貴志さんに、感謝いたします。

2009 年 9 月 11 日

